

---

# 生贄姫とカリスマ公爵

---

樹 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生贄姫とカリスマ公爵

### 【Nコード】

N9244DS

### 【作者名】

樹 泉

### 【あらすじ】

気づいたら赤子になっていたティアラ。リベリア王国第二王女に転生したティアラはすくすく大きくなっていった。ある日鼻歌を辿り東屋に向かうと少し年上の少年が居た。少年アルトラムの鼻歌が気になるティアラだったが邪魔が入って話はできなかつた。前後編になります。

## 前篇（前書き）

遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひします。

## 前篇

「……」

目を覚ました赤子はベッドの天蓋を見つめた。

(え、此処どこ。私は死んだはずじゃ……)

勢いよく起き上がろうとして、体が動かない事に気付く。  
いや、少しは動いたのだ。だが、目に映った手に驚く事になった。

(何この紅葉の様な赤ちゃんの手は?!)

手を何とか持ち上げ、赤子は転生した事に気が付いた。  
感情は追いつかないようだが。

鏡に映る金髪金眼の人形の様な少女を見つめティアラ・フォン・リベリアは溜息を吐いた。それに合わせ鏡の少女も溜息を吐き、鏡に白い霧を作る。

(何度見ても美少女、いえ美幼女よね)

左右対称に作られた自身の顔を見つめる。綺麗というより、可憐で可愛らしい印象を受ける。

もう一度溜息を吐くと、くるりと踵を返し部屋の扉に向かう。  
ティアラが扉の前に着くと、控えていた侍女が扉を開く。

何の因果か、ティアラはリベリア王国という国の第二王女に転生

してしまったのだ。そう、ティアラ・フォン・リベリアは転生した赤子だった。

そこからすくすく育ち、今では6歳になっていた。

この世界は前世の地球という星とは違う星か、異世界に当たる事をティアラは嫌というほど見る事になった。

この世界には魔法というものがあるのだ。ティアラの前世で見た漫画やアニメ、小説やゲームの中にしかなかった魔法。発動方法は呪文などなく現象を想像するだけ、と至って簡単だ。

火の玉や氷の矢のように飛ばす事も出来れば、竈に火をつけたり畑に水を撒いたりもできる。実に応用が利くものだった。

4大元素、火・水・風・土という基礎元素と、雷・氷・樹という派生元素、特殊元素と呼ばれる光・闇の9種類がある。

適正と呼ばれるものがあり、その適性の魔法は誰でも使う事が可能で、後は訓練次第で増やす事ができる。

平民であれば1〜2属性の適正があり、貴族は階級に寄るが2〜4属性の適性を持つ。王族は更に特殊属性が使える事が多い。

何故此処まで分かれるかというと、魔法の適性は遺伝しやすいのだ。恐らく過去に、魔法の適性が高い者が国を起こしたのだろう。歴史の書を読みティアラはそう思った。何処の国も似たようなものだった。

トコトコ歩き、庭園の一角にたどり着いたティアラは溜息を吐きたくなった。後ろには騎士が控えていて、非常に落ち着かない。

庭園の一角には小さな花壇がある。小さいといってもそれは庭園に比べればというものだ。ティアラの前世で見た花壇を思えば明らかに規模は大きい。

花壇の縁に着いたティアラは、飛び出している草を選別しながら抜き出した。

(ああ、落ち着く)

雑草を抜き終わるとティアラは花壇に掌を向ける。ジョウロから出る水を想像しつつ魔力を練り、力を解放した。

そうするとティアラの掌から、細い水が幾つか分かれて出で来る。

「　　」

水を撒き終わりティアラは頷くと、かすかに音楽が流れて来た。それは鼻歌で、数秒で止んでしまった。

ティアラはハツと顔を音の聞こえて来た方に向けると、駆け出した。

「殿下御待ちを」

騎士達がティアラを必至で止めるが、ティアラの足は止まらない。

(あの曲は前世で聞いたアイドルのヒット曲のサビの部分だわ)

ティアラが駆け込んだ東屋には一人の少年が佇んでいた。赤髪赤眼の少年だ。

ティアラは息を整えると、少年に声をかけようとした。

「そんな所で何をしているんだい。ティアラ」

「ッ、ハルト兄様」

「おや、アルトラムもいたんだね」

ティアラが声をかけようとした時声をかけて来たのは、ティアラ

の5歳年上の兄ハルトライル・フォン・リベリアだった。

「これは殿下方お揃いで。ティアアラ殿下に置かれてはお初にお目もじつかまつります、アルトラム・フォン・タルレスと申します」

そう挨拶するとアルトラムはティアアラの手を取り、ティアアラの手の甲にキスを落とした。

それは礼儀に合わない挨拶であった。

しかし、アルトラムの纏う空気は非難を受け付けなかった。

王族以上に王族らしい覇気のある空気に、ティアアラもハルトライルも咎める事ができずにいた。

「挨拶ありがとうございます。わたくしはティアアラ・フォン・リベリアと申します。ご存知の通りリベリアの第二王女です」

空気を変えようとティアアラは自己紹介をした。

本来話しかける順は身分の高い者からだ。

ハルトライルとアルトラムは顔見知りだが、ティアアラとアルトラムは顔を会わせたのはこれが初めてだ。ハルトライルが二人を紹介するのが筋だった。

「本日はもう辞す予定ですので。失礼いたします」

そう言うとアルトラムは東屋を去って行った。

「ティアアラ何もされなかつたかい？」

「ええ、ハルト兄様。アルトラム様はタルレス公爵家の御嫡子ですか？」

「ああ、そつだ。何もなかったのなら良い。もう行きなさい」

「はい。ハルト兄様」

そうしてティアラは東屋を後にした。

しかし、ティアラの頭の中は先程の鼻歌で埋め尽くされていた。

東屋でアルトラムと会って以来ティアラは、ふとした瞬間にアルトラムの事を思い出していた。

あの鼻歌の曲についてアルトラムに尋ねようとした事もあったが、何故か邪魔が入り未だに聞けていない。

その為ティアラにできる事はアルトラムの噂を集める事しかできなかった。

知識は既に高位文官並みにあり、剣術は騎士団並みに使え、魔法は国でも5指の指に入るほどである。というものであった。

それはティアラがアルトラムの噂を集めて暫くした、ある晩餐の席でのことだった。

「ティアラ、余リアレの事は調べぬ方が良い」

その注意はティアラの父、ベルハルト王の言葉である。  
アレとはアルトラムの事であろう。

「何故ですか？」

「お前はアルトラムを恐ろしいと感じなかったのか？」

ティアアラの言葉に答えたのは4つ年上の下の兄、ベルトライルも  
のだった。

「ティアアラは幼いから余り感じないのかもしれないけれど、わたくし達にとってアルトラム様はとても恐ろしいのです。あの知識、武力、カリスマ性はとても危険ですよ。王家の血が入っているせいか特殊元素も扱えて、御実家も公爵家あらせられるわ。いつわたくしたち王家に牙を向けるか分からないのよ」

ティアアラに分かりやすく解説したのは2つ年上のティアアラの姉、  
第一王女のアンネフィーネ・フォン・リベリアであった。

「だが危険だからと言って排除は出来ぬ。アレを擁護する者はそれ  
なりの数があるし、此方から手を出せば手痛いしっぺ返しが続いて  
いよう」

ベルハルト王はそう締めくくった。

それからというものティアアラはアルトラムの事を調べるのを止め  
た。自ら調べずともアルトラムの事らしい話題は何処からか入って  
来るからだ。

ティアアラのアルトラムにたいする思いは燻りながら、時は過ぎて  
行った。

前篇（後書き）

誤字脱字ございましたら感想でお願いいたします。

よろしければ明日お会いしましょう。

## 後編

ティアラは15歳の誕生日を間近に控え、ベルハルト王に呼ばれて王の部屋へやって来ていた。

ティアラは扉をノックし、許しを得てから室内に入った。

王の部屋には王太子であるハルトライルも居り、ティアラは挨拶をし、空いているソファアへ座った。

「ティアラお前の降嫁先が決まった。成人の儀後、アルトラム・フオン・タルレスに嫁ぐように」

「畏まりました」

ベルハルト王の命令にティアラは是と言うより他なかった。

この中世の様な考えの世界において男女平等とは夢のまた夢、男尊女卑の世知辛い世の中なのだ。

ずっとアルトラムと話してみたかったティアラにとって、悪い話ではなかったのだ。

話す為に結婚しなければならぬのは気が重いが、ティアラは転生者である。他の同年代の少女と比べて結婚観はとても淡泊であった。恋愛結婚に憧れはするものの、転生後の王族としての教育で更に淡泊になったのかもしれない。

「本来はアンネフィーネが嫁ぐ予定であったが、アンネフィーネが嫌がった事とアルトラム本人からティアラの方が良いと言われた事もあり、ティアラが嫁ぐ事になった」

「ティアラすまないね」

「是非も御座いません」

ベルハルト王の説明が終わり、ハルトライルが申し訳なさそうに謝罪した。

二人にとつて、いや、王家に取ってアルトラムに首輪を着ける事は急務であった。

ベルハルト王に呼ばれ降嫁先が判明した後、ティアラは自室で刺繍をしていた。アルトラムに渡す為だ。

アルトラムといえばタルレス公爵家を早々に継ぎ、現在タルレス公爵になっていた。

ティアラは刺繍針を動かしつつ、記憶にある形と差がないか慎重に確認している。

出来上がった柄に不備がないか確認したティアラは、侍女に箱を用意させその箱に刺繍をしたハンカチを閉まった。

「これを渡す時が勝負の時よ」

ティアラがいくら結婚に淡泊とはいえ、恐怖はあった。一言自身を鼓舞すると結婚式に思いを馳せた。

ついに婚儀とお披露目のパーティーが終わり、深夜の寝室にティアラは独り座っていた。

ナイトガウン越しにティアラは震えていた。手に持った箱もティアラの震えに合わせ振動している。

寝室に独りでいると思考がネガティブな方向へばかり進む。幼い頃聞いたあの鼻歌は、実は聞き間違いだっただのではないか、アルト

ラムではなかったのではないかとそんな事ばかり考えてしまう。

思考がグルグル迷走していると、寝室の扉がノックされアルトラムが入って来た。

ティアラは姿勢をただし挨拶をすると正面からアルトラムを見た。始めて会った時に比べグツと伸びた身長は高く胸板も厚い。だからといって筋肉隆々ではなく細く引き締まっている。

「こちらを」

「何だ？ 何が入っているんだ」

ティアラは目の前までやって来たアルトラムに小箱を手渡した。

「後で見るとしよう」

「今、見てはいただけませんか？ 今日の為に用意した物です」

「フム」

アルトラムはティアラから手渡された箱を開けると、中のハンカチに目を落として目を見開いた。

「これは誰が縫ったんだ？」

アルトラムの声は珍しく動揺で掠れていた。

ティアラはアルトラムのその反応に僅かに溜息を洩らす。そして肩からは自然とこわばりが抜ける。ティアラが縫ったハンカチには青い狸が縫われていた。

「わたくしが縫いました。……アルトラム様も同じなのですな」

アルトラムは瞑目すると口を開く。

「まさかこんな所で元同郷の者を会うとわな。……」「マギのまどろみ」という物を聞いた事はあるか？」

「いいえ。魔法関係の言葉でしょうか？」

「……そうか。知らないのならそれで良い」

「不勉強で申し訳ございません」

「いや。……さて、本題に戻るか」

アルトラムはニヤリと笑うと、ティアラを抱きベッドに向かった。

「ほ、本題って！？ な、べべべベッド。あ、あのですッン……」

動転するティアラにアルトラムがキスを落とすと、ティアラは真っ赤になって黙ってしまった。その様子を見てアルトラムはクツと笑いティアラをそっとベッドに横たえた。

チュンチュンチュンと小鳥の声を聞きティアラが目を覚ますと、窓から朝日が射していた。

「起きたか。調子はどうだ？ 何か願いがあれば聞こう」

「ん？ ……へ、あっ」

寝ぼけていたティアラは現状を思い出し真っ赤になり布団に潜った。

「ククク、布団から出てきたらどうだ。願いはないのか？」

アルトラムの悪戯子の様な言い回しの言葉に、ティアラは顔だけ布団から出すと何でも良いのかと聞き、アルトラムは肯定した。

「では、王家に膝を折って下さい」

「ふ、ハハハ。そうきたか、ククク」

「何で笑うのですか！？ わたくし何かしましたか！？」

ティアラの事情の後とは思えぬ言葉にアルトラムは大笑した。王家から生贄のように差し出された少女は、アルトラムに食われて直凜とした王家の花だったからだ。

「ク、わ、分かった。お前がお前である限り俺は王家に屈しよう」

未だ笑いが収まらぬアルトラムにティアラは再度布団に潜ろうとして止めた。

「本当ですか？ 約束ですよ」

「ああ、約束だ。今日城に行つてこよう」

アルトラムは笑いを納めるとそう答えた。

布団に横たわるティアラに一度キスを送ると、アルトラムはベッドから抜け出した。

アルトラムは夕方王城から戻ると、ティアラに三通の手紙を渡した。

「お父様とハルト兄様、ベルト兄様からですね。いったい何でしょう?」

三人からの手紙には言い回しは違うが、似たよった内容だった。アルトラムが王家に膝を折った事への感謝とティアラを生贄の様に送ってしまったことへの謝罪が書かれていた。

「感謝は受け取りますが謝罪は受け取りませんよ。わたくし楽しんで居りますから」

そう言ってティアラは微笑を溢した。

## 後編（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

誤字脱字は確認していますが漏れがあるかもしれません。見つけたら感想いただけると幸いです。

残りは番外編のみです。乙女ゲームタグはそちらで出てきます。

## アルトラム(前書き)

一人称になっています。

## アルトラム

俺の今の名前はアルトラム・フォン・タルレスという。  
転生してしまった様だ。

最初転生に驚き、異世界に来てしまった事に更に驚いた。

この世界には魔法がありオタク心をいたく刺激された事を昨日の様に憶えている。

転生先はリベリア王国の由緒ある公爵家で、魔法適正も5種類あって俺は歓喜した。使える適性には、特殊属性の光もあり俺の心は興奮して行った。

しかし、俺の興奮のボルテージは直ぐに鎮火する事になった。

【国立マギ・ノリア魔法学園】この学校の名前を聞き俺が『マギのまどろみ』という乙女ゲームの世界に転生した事が分かった。

何故よりも寄って乙女ゲームの世界に転生したのだろうか、タルレスという姓名に聞き覚えがあった訳だ。

前世で姉と妹がハマった乙女ゲーム『マギのまどろみ』、名前はほんわかしているが、ヤンデレ系乙女ゲームである。

俺が何故知っているかというと、姉と妹の会話だけではなく、実際俺もやらされたからだ。「男の子の気持ちっていまいち分からないのよね」と、姉のゴリ押しでプレイさせられたのだ。はっきり言ってヤンデレの気持ちなんて分からない。拷問の様だった。

俺はヤンデレ系乙女ゲームの世界に転生したストレスを周りに当てる事でしか発散できなかった。

今思えば子供になった体に引き寄せられ随分子供っぽい事をしてしまったと思う。当たり前である騎士や魔法使い、王家には本当にすまなかった。同い年であるハルトライルには事あることに実力の差を見せつけたのだ。良く首と胴体が離れなかったな。

大分俺自身が落ち着いた頃、俺は同年代の子供に遠巻きにされる

ようになっていた。代わりにおっさんやお姉さんとの会話が中々に面白い事が分かった。

俺が王城に上がるようになって暫く、面白い少女を見つけた。

城の庭園の一部にある花壇を幼い少女が一生懸命手入れしているのだ。側には騎士が何時も控えて警護していた。

高位以上の貴族の娘が庭仕事をすると驚きだった。驚いて同時に興味をそそられた。その後その少女について調べて見ると、王家の末姫、第二王女のティアラ・フォン・リベリアである事が分かった。まさか王家の姫が土いじりするとは思いもしなかった。

王城に上がる度、ティアラを探し庭園を歩いた。ティアラの手入れする花壇は決まっているのか、東屋近くの花壇だけで、何時も楽しそうに手入れをしていた。

ティアラを見ていると俺の心がほんわか暖かくなるのを感じた。

ある日、何時もの様に東屋からティアラを見ていると、気分が高揚し鼻歌を歌っていた。前世でヒットした曲だ。

直ぐにハツとして歌うのを止めたが、ティアラに聞こえたのか、ティアラが東屋にやって来た。これで自然にティアラと話せると喜んだのもつかの間、第一王子であるハルトライルがやって来たのだ。やっとティアラと二人きりで話せると思った気分はただ下がりである。

取り合えず挨拶してサツサと帰る事にした。ハルトライルには良く思われていないからな。

その後王城でティアラと会う事はたまにあったものの、見事にハルトライルとベルトライルに邪魔された。

これは今までの俺の行いのせいだろう。反省した所でどうにもなるまいと落ち込んだ。

18歳になった時、親父からタルレス公爵家を継いだ。

同時に第一王女であるアンネフィーネとの婚約を示唆されたが、ティアラの方が良いとこの話を断った。

深層の姫といった感じのアンネフィーネより、花壇で笑っていたティアラの方が良かったからだ。

ティアラが成人する2年後また婚姻の話がやって来るだろう。ティアラと結婚できるよう根回ししていた方が良いだろうか。

俺が20歳になり、王家からティアラの降嫁が発表された。

根回しの成果かティアラの降嫁先は俺一択となった。屋敷で歓声を上げ、使用人に生温かい目で見られ赤面した。

王家の姫の降嫁という事で、結婚式は盛大に行われた。

夜、ティアラがいる寝室に向かうさなか注意を怠ればスキップしそだった。

寝室にたどり着き夜着のティアラを見ると、気分が降下した。ティアラはかすかに震えていたのだ。

それもそうだろう、成人したとはいえ15歳の少女がたいして話した事もない男に嫁いで来たのだから。

何か和むような話題はないかと模索していると、ティアラが挨拶してきた。

「ふつつか者ですがどうぞ宜しくお願い致します」

ティアラはそう言うと静かに頭を下げた。

「こちらを」

「何だ？ 何が入っているんだ」

ティアラに渡された小箱を俺はテーブルの上に置いた。

「後で見るとしよう」

「今、見てはいただけませんか？ 今日の為に用意した物です」

「フム」

少し性急過ぎたかもしれない。此処はゆっくり話してからの方が良いだろう。そう思って箱を開けると、青い狸、いや猫が刺繍されていた。

「これは誰が縫ったんだ？」

俺の声は動揺で掠れていた。

「わたくしが縫いました。……アルトラム様も同じなのですね」

まさかティアラも転生者だったとは。もしかしたら乙女ゲームの事も知っているかもしれない。

乙女ゲームだが、今は開始18年前だ。攻略対象で一番年上の者が3歳時という事を調べてある。メインヒーローがタルレス公爵家の嫡子で母親が第一王女、あれ、原作壊してしまったか？ まあ、良いか……。

「まさかこんな所で元同郷の者を会つとわな。……」マギのまどろみ」という物を聞いた事はあるか？」

「いいえ。魔法関係の言葉でしょうか？」

「……そうか。知らないのならそれで良い」

「不勉強で申し訳ございません」

どうやら乙女ゲームの事は知らないらしい。

「いや。……さて、本題に戻るか」

ティアラの震えも収まったので、ティアラをそっと抱き上げベッドへ向かう。

「ほ、本題って！？ な、べべべベッド。あ、あのですッ……」

動揺するティアラが余りに可愛く、唇を軽く摘まんだ。

翌朝の気分は最高のものだった。

隣ではティアラが布団に包まって寝ている。

鳥の声でティアラがもぞもぞと起き出した。

「起きたか。調子はどうだ？ 何か願いがあれば聞こう」

「ん？ ……へ、あっ」

寝ぼけたティアラもまた格別だ。

「ククク、布団から出てきたらどうだ。願いはないのか？」

ティアラは布団に潜ろうとして「本当に何でも良いのですか？」と聞くと、射す様なまなざしで告げた。

「では、王家に膝を折って下さい」

「ふ、ハハハ。そう来たか、ククク」

「何で笑うのですか！？ わたくし何かしましたか！？」

どんなに可憐に見えても王家の姫なのだ、と思いつつそのギャップに俺は吹き出した。

「ク、わ、分かった。お前がお前での限り俺は王家に屈しよう」

未だ笑いの収まらぬ俺を見て、ティアラは顔を赤らめ再度布団に潜ろうとした。が、途中でやめ顔を出すと満面の笑みで告げて来た。

「本当ですか？ 約束ですよ」

「ああ、約束だ。今日城に行ってください」

俺はティアラにキスをしてからベッドから出ると、登城の支度をしました。

「アルトラム・フォン・タルレスただいま参上いたしました」

王の前で跪き挨拶を述べる。

「して、今日は如何したのだ？」

「妻と約束致しまして、王家に膝を折ると」

「なんと、真か？」

「このアルトラム本日より王家の剣となりましょう。……ティアラが我が妻であるかぎり」

「……あい分かった」

目を見開く王に釘を刺しておく。

ティアラと約束がなくともそろそろ潮時だった。俺を王に押す勢力も少しながら居るのだ。ティアラとせっかく結婚したのに反逆罪で曝し首にはなりたくないからな。

「ティアラを宜しく頼む。……後で手紙を持って行ってくれぬか」

「御意に」

宜しくされなくともティアラは大切にするさ。

ああ、早く帰ってティアラに会いたいな。

## アルトラム（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございます。ごぞいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9244ds/>

---

生贄姫とカリスマ公爵

2017年1月11日19時18分発行